

増加を示し、着色原料としては大阪方面よりコバルト類(金ツル・墨印・ライオン・鹽化・飛行船)は二〇貫九九五匁(五・九七二・七圓)・クロム酸は二、八二五斤(一、二二〇圓)・硫黄一四七貫七五〇匁(八八・七圓)・鹽化クロム一四封度(一六・八〇圓)・ルチール二五〇封度(二七五圓)・酸化銅一〇封度(一一圓)・酸化亜鉛 四八封度(二五・五圓)・鐵砂二七・四貫(二二・六五圓)・酸化滿俺一封度(五・七圓)・骨灰九封度(七・二圓)及其他の合計で七、六四四・八六圓である。

(未完)

## 新著紹介

### ○秘書類纂財政資料

上下二卷 伊藤博文編 非賣品

明治年代政治上の秘書を伊藤公の手で編纂されたものがあつたので、この頃になり秘書類纂刊行會から續々と出版されてゐる。實に維新史の根本資料として、秘藏されるべきものであるが、最近に出た財政資料の下卷には種々有益の書がのつてゐる中に筆者は輸出入品の取調書が兵庫縣運上所からの公文書として出てゐるのを見て、誠にめづらしく之を讀んだ

辰年とあるから明治十三年の輸出入品物であるのであらう、輸出にしても輸入にしても品目が簡單であり且つ珍らしい、丹柄・吳呂服・羅背板・納耳羅紗・唐棧・モヘール・タイベツなどの名目を見ると古いオランダとの交通以來のことが思ひ出されて懐古の情誠に切なるを覺えた。(藤田)

### ○考證法顯傳

足立喜六著 三省堂發行 定價四圓八十錢  
五百部限定出版、菊版二七九頁

千五百年前の中央アジア・印度・南海の地理風俗宗教に關する根本的資料たる佛國記の解釋として、我國最初の出版である、既に西洋の學者も研究を試みたことであるが足立氏に至つて、彼等のよつた經文そのものの校勘が不足してゐるのを慨し、まづ拮据勉勵して、本文の校正をなし、然るのちにその委曲を説述さるゝに至つた。耶婆提國の考などは、いかゞかと思ふけれども、全體として近來の歴史地理學界の寄與として大きい業績である。我等はかうした篤學の先輩に教へられて今更らに作すべき多くの問題のあるのを痛感してゐるものである、この本が五百部位しか賣れぬとすると、我國の讀書層もあまりに貧弱であるのが慨しい。(藤田)

### ○歐羅巴地誌

有賀春雄著 刀江書院發行  
定價二圓二十錢

菊版三百頁の手頃な歐羅巴地誌で、主として參考書として執筆されたもので、中學生や高等學校の學生の讀本として提供されたものである。挿畫は原書?を寫されてゐるから明快

ではあるが、日本文に翻譯する丈の勞力を惜むのはよくないことだと思ふ。記事簡明であるのが本書の生命であらう。

○獨和言林 佐藤通次著 白水社發行 特價三圓五十錢

獨逸語の字引では、我等は登張・片山二氏のもので大正から昭和の時代を代表したものと、全國の青年がくびぎきしたものが、今や昭和の更新期に入つてこの新著を得るに至つたことを誇としなくてはならぬ。同僚古松文學士の熱心な助力校正を得て本書は正に獨逸語學生唯一の好指針たらんとしてゐる、其特色は第一にゾーデンにより嚴密な正書法を用ひ、第二發音はジープスの標準發音に基き、萬國音標文字を以てし、第三専門に流れざる範圍でクルーゲの語原辭典によつて正しき語原解を掲げ、譯解もヘルマンパウルの辭典に従ひ言葉の意味の心理的・歴史的解釋を加へ、第五に前綴の意義を明にし、第六基本語に語根をしめし、第七外來語を明快にし、第八英語の同系語を照應せしめ、第九に譯語としての日本語を正確にするといふ九大特色が盛られてゐる。さうしてかうした特色はいづれも在來の獨逸語辭典には等閑にされてゐたのであるから、正に獨逸字典界での新生面を開いたものといひうるであらう。(藤)

○綜合新植物圖說 村越三千男著 照文社發行 定價 五圓

篤學の著者三十二年の苦心が報ひられて、こゝにこの四六

新著紹介・雜報

倍版四百七十一頁の大本と術語辭典百五十八頁、和名からの索引・漢名からの索引・雜句名索引凡百十頁を合本にして約七百頁尙然たる大冊子が出來た、定價もやすいが、特價三圓五十錢は猶更にやすい。日本の植物名と、それがどこに、どういふ風に分布してゐるか、いかなる生活狀態であるかといふやうなことは本書によつて一日瞭然誠に有益な資料を與へられたものとして、著者に感謝せずには居れない。中等學校や小學校の圖書室は勿論、一般家庭にこれ位の植物寶鑑ともいふべき辭典は必備であるやうな時代が遠からず日本にも來なくてはうそであると思はれる。(藤)

雜報

○丹後國宮津灣岸の埋没林 宮津灣頭に近く、宮津

町と獅子崎<sup>シウサキ</sup>部落との間には東方の花崗岩地と宮津灣岸との間に狹長なる海岸平野があつて、海面より稍高く、約二・五米位の低き平地をなす。京都電燈會社に於て營造物建設のため、地表下二一米乃至二四米の試錐を行ひ、地盤の強度を測定したるに、海岸より凡一〇〇米を隔てたる地下、〇・八米乃至三・五米に於て二・〇米乃至三・七米の厚さを有する木屑混りの粘土層の分布廣きを知り、更に敷地施工のため土地を掘り下げたるに杉・樅等の針葉樹と思はるゝもの、其他潤葉樹と